

## 平成 28 年度 第 4 回「防災スペシャリスト養成」企画検討会

## 議事概要

## 1. 検討会の概要

日 時：平成 28 年 10 月 25 日（火）10:00～12:00

場 所：中央合同庁舎 8 号館 5 階 共用 A 会議室

出席者：林座長、井ノ口委員、岩田委員、牛山委員、宇田川委員、大原委員、鍵屋委員、  
国崎委員、黒田委員、田村委員、中林委員、丸谷委員、渡邊委員  
加藤政策統括官（途中退席）、安邊参事官、山田参事官補佐、田口参事官補佐

## 2. 議事概要

議題ごとに各委員による意見交換を行った。主な意見等は次のとおり。

## (1)有明の丘研修(第1期)報告について

- 講義で実践報告を行う場合、受講者の興味や関心は非常に高く、満足度は高いと思われる一方で、特定の経験による見解が正しいこととして伝えられることがあるため、その取り扱いに工夫が必要である。
- 実践報告を行う場合は、講義のフレームは実践報告者ではない人が話したり、事前に話してほしい内容について打合せをしてアレンジしていただいたりして対処した。
- 実践報告をうまくいかせるには、こちらが意図した効果的な講義をしてくれた講師を蓄積していき、その講師に繰り返し講義していただくことも大事ではないか。
- 実践報告を聞いて追体験してもらったうえで、座学で知識を身につけてもらうという順番にするのも効果的だと思う。
- 防災基礎コースでは、経験者ではなく、実災害の検証資料を読むことを通じて、災害を俯瞰的に体験してもらう講義を行っている。しっかりとした災害検証報告書を教材にすることで、特定の人々の経験談だけでなく、いくつかの視点を同時に学べる。
- 総合防災で実践報告を行った講師は、非常に客観的に自己分析をして検証まで行った内容で非常によかったが、一つの事例でしかない。いろいろな事例にどこまで広げていけるかという課題がある。
- 受講生の経験や職位がかなり違う受講生が同じコースを受講している。受講生像にあわない人がいたりするので、どうやってそろえていくかが課題である。
- どのコースを履修していないと受講できない等、受講資格のような前提条件を置く方法で受講生のレベルをある程度統一する方法もあるのではないか。
- 受講資格のようなものを実施するとすれば、①防災基礎と②災害への備えから⑥復旧復興までのオペレーション、⑦指揮統制・⑧対策立案の災害対策本部活動、⑨人

材育成の長期的取組のようにざっくりと3つに分け、「⑩総合防災」を受講するには、これら3群の中から一つ以上受講することを条件とする方法が考えられる。

- 建築、土木、福祉、自衛隊、消防など防災対策に関わる職種全般の人たちを受講生に取り込む必要があるため、各コースの受講者像を明らかにする必要がある。
- 防災は各職種の協力を必要とする総合的活動であることを前面に出し、省庁を超えた職種の方たちに受講してもらうことが組織のキャリアアップにつながる。
- 各省庁の講師を活かす方法も考えていく必要がある。
- 標準テキストや研修指導要領などができてくれば、各省庁の職員でなくても講義できるようになるように思う。
- 各都道府県の受講状況を明らかにし、今後受講が少ない地域などに対して受講の働きかけを行う必要がある。

## (2) 研修における課題検討 <①研修指導要領>

- 事務局から提案のあった「研修指導要領(案)」の構造については同意する。
- 「研修指導要領」は、有明の丘研修のコーディネーターや講師が読むべきものとして作成する。さらに、単に有明の丘研修にとどめず、我が国の防災行政にかかわる人たちが皆読むべきものとしても作成したい。
- 「研修指導要領」は、教えるべきこと、身に付けるべきことを箇条書き的に書いていく。
- 具体的な指導の仕方は、コーディネーターが、その時々新鮮な話題と講師の特性に応じて考えればよいのではないかな。
- 「標準テキスト」(パワーポイントのスライド)は、コンテンツの教案(指導方法が書かれた資料)と考えられる。
- 「標準テキスト」を充実させていき、講義する際は必要なスライドを取り出して、講義内容を編集できるようになるとよい。
- 現在作成している「標準テキスト」は、講義時に映し出すものではなく、詳細なものになっている。講義中に表示できるよう、要点をまとめたシンプルなスライドと、講義内容を書いたノート部分に分けて作成するとよいのではないかな。
- 「技能」とは、標準処理手順の様な知識との組み合わせで、あるアクションを起こせる能力のようなものだと考えてはどうか。
- 「技能」は、点数で評価するよりは、上手い下手にはかかわらず出来るようになることとして評価するもの。検討しやすそうな単元で案を作り、議論してはどうか。
- 「態度」は、一つの単元にあるというより、2日間を通じてコース全体で身につけるものとして設定できるように思う。
- 「態度」は目的のようなものと考えられる。目的別に態度を書き分ける必要があるのではないかな。
- 「態度」は設定しないという事務局案だが、「態度」は「知識」として教えることとは違った観点であり、受講生が適切に能力を身につけるためには重要なことだと思われる。「態度」も含めて具体的に書いてみて、整理していきたい。

- 学校教育では、子ども達にこういう人間(おとな)になってほしいという願いがあり、そこに「知識」「技能」「態度」が位置づく。防災スペシャリストとしてどうなってほしいかという視点で見ると、「技能」や「態度」も比較的書き出しやすいのではないか。
- 災害対策の本当の目的をとらえて、どうあるべきかについて掘り下げて「態度」として書き出していくことが重要ではないか。
- 今年度は、「知識」や「基本用語」を検討していく過程で、「態度」や「技能」についても書けそうであれば書いていくこととする。
- 「基本用語」は、用語の解釈はいろいろあり、書くのは難しいのではないか。UNISDR(国連国際防災戦略事務局)のターミノロジー(防災用語集)や、いくつかの学会で出している災害用語辞典を参考にするとよい。
- 各コースの第6階層の分け方が縦割りにならないよう、各コースに副題を付けるなどしてその内容がもう少し具体的にわかるようにした方が、理解が進むのではないか。
- 講義では、第6階層で設定した内容は必ず教えることとすべき。この原則を踏まえて、階層の見直しを図る必要がある。
- 実際の研修では時間などのリソースに制約があるため、最終的には、一つの単元で学べる上限値なども学んだうえで、階層を整理していく必要がある。

### (3) 研修における課題検討 <②e ラーニング>

- 防災基礎コースのように膨大な基礎知識を教えるコースでは事前学習に重点を置き、応用的なコースでは事前に少し基本的な知識を知っておいてもらいたい程度というように、eラーニングの扱いはコースによって違っていてもよいのではないか。
- 確認テストは講義後に答えるものとして講師が作成したが、レベルをそろえるための事前学習用のテストは基礎的な内容になるため、講師に依頼するのは難しい。事務局とコーディネーターがよく相談して作成する必要がある。
- まずはテストを実施してみて、分からなかったら受講してください、というような形でスタートさせてはどうか。また、正答率からコース内容を検討したり、テストを受けた人がどの程度研修を受講したかを見るための基礎データを収集する機会にしてはどうか。
- テストを事前学習として位置づけ、実施時には、受講生に事前の適否判断材料としてとらえられないように配慮したい。
- 研修への思いを一緒に聞くなど、受講生とのコミュニケーションが密になるような方向でテスト(事前学習)を実施してはどうか。
- 現在目指しているのは、身につけるべき能力の形式知化であり、長期的に見れば防災行政に関わる知識の体系化である。そのことを踏まえ、テスト作成は負荷がかかるが、まずは○×形式でテストを作成していくことが大事。
- 平成29年度以降からは、本格的なeラーニングに取り組みたい。有明の丘研修に來られない方を対象にもするし、有明の丘研修の制約や限界を突破するためにも活用したい。このため、次年度からは、eラーニングの専門家と防災の専門家とが密に連携した中で本格的に実施する必要がある。